

境港市における観光活動設計のプロセスと今後の課題 - 水木しげるロード周辺の事例を中心として -

調査研究サブディレクター 澤田廉路

【要旨】

2007年、147万人を越す観光入込み客があった境港市の水木しげるロードの活性化してきた要因を観光活動のプロセスを追って検証した。

最初に行政機関が公共事業で基盤整備をし、次に公的な機関が様々な演出支援をし、最後に民間団体が人を呼び込むイベントをするようになった大きな流れがある。その展開のプロセスを追ってみると次のようなことが明らかとなった。

- ・同時期に行われていた商店街活性化の水木しげるロード整備とJR境港駅前地区の土地区画整理事業がタイミング良くドッキングした。
- ・水木しげるロードの妖怪ブロンズ像設置は徐々に継続的に行い、境港市では整備の節目ごとに水木しげる氏を招いて式典を開催するなどの演出も行った。
- ・境港市の財政が逼迫する中で、妖怪ブロンズ像のスポンサーを全国公募するなどの知恵を民間団体が絞り、各団体も協力しあって整備をすすめた。
- ・水木漫画の人気キャラクターの「鬼太郎」や「妖怪」に託けた取り組みを民間団体が中心になりつつ、行政機関、公的機関も支援して、それぞれで出来ることを行った。

今後は、観光地化して活性化した地域に起こりがちな、どこにでもありそうな地域のイメージに相応しくない観光土産店ではなく、地域のイメージにあった商店をどうつくっていくか、今まで成果を上げてきた各機関のバランスの良い連携を活かして、水木しげるロード周辺商店街の活性化を、拡がりをもってどう継続発展させるかが課題である。

1. はじめに

境港市では2007（平成19）年の年間観光入り込み客が水木しげるロードに1,478,330人、水木しげる記念館には274,638人の入館者があり鳥取県の十大ニュースにもなった。一方、北栄町の青山剛昌ふるさと館は2007（平成19）年3月18日に開館し、12月末までに、73,276人の入館者があった。同館では1年間の目標来館者数を13万人としているが、とてもこの

目標には届かない厳しい状況となっている。青山剛昌ふるさと館では、「名探偵コナン」の著作権等の関係で、集客力のある事業展開や営業活動が行いにくいといった問題があるが、水木しげるロード、水木しげる記念館がどのようなプロセスを歩んだのか、観光活動設計といった視点で検証すれば参考になると考えられる。

境港の水木しげるロードも整備当初から多

数の観光入り込み客があったわけではなく、様々な取り組みが各組織の連携のもとに行われて、徐々に成果をあげたのであって、まずそのプロセスを踏まえる。そして、今後も引き続き境港の水木しげるロードでは入り込み客を確保できるのか、観光地化する地域のあり方として問題点はないのか課題を探る。

2. 研究の方法

2.1 用語の定義と研究目的

伝統的建造物群保存地区のまちなみ景観などを観光資源と捉え、観光客を受け入れる種々の行為を大森、西山氏は「観光活動設計」と定義付け、「空間設計」「演出設計」「誘致設計」の3つの設計ステージ¹の概念に分けて活動を分析している。

その中で「空間設計」を地域の魅力および地域の観光活動の基盤整備の設営設計と定義し、「演出設計」は「空間設計」によって地域にしつらえた空間をホストとゲストの交流の場としてどのように使いこなすかという地域内のソフト設計と定義付け、「誘致設計」は「空間設計」「演出設計」によって準備された地域にどのような客層をどのようなパイプで誘致するかに関する対外ソフト設計と定義付けている。このような考え方を境港市の活性化事例に当てはめてプロセスを分析して、同様な観光集客を目指す地域の参考にするため境港で事業活動の主体となった組織、事業内容の変化を明らかにして成功要因を考察する。

2.2 研究の方法

境港市役所を中心とする行政の水木しげるロード事業関連資料、広報誌「市報さかいみ

など」、境港商工会議所「SAKAIMINATO会議所ニュース」、新聞の検索等で約20年間の出来事を掘り起こした。その上で、境港市、境港市観光協会、水木しげるロード振興会で聞き取りを行い、内容を確認し補正して、今までの経緯全体を把握した。それらの事業の取り組みを、JR境港駅の移転を含む土地区画整理事業、妖怪漫画ブロンズ像の設置、水木しげる記念館などの「空間設計」とイベント等の「演出設計」「誘致設計」に活動時期を4期に分けてプロセスを分析する。

3. 境港の観光活動設計の分析

3.1 時期別の活動内容と事業主体

境港市役所内に若手職員14名からなる「街づくりプロジェクト委員会」が1988（昭和63）年に設置され、「緑と文化のまちづくりフォーラム」に水木しげる氏をパネリストとして招いて、着想した水木漫画活用のアイデア検討から事業着手の1992（平成4）年までの間を **構想期**、水木しげるロードに妖怪ブロンズ像が23体設置された最初のオープン1993（平成5）年から境港市で実施された「夢みなと博覧会（鬼太郎シアター）」開催の1997（平成9）年までを **初動期**とし、1998（平成10）年の水木しげるロード振興会設立から水木しげる記念館開館の2003（平成15）年までを **模索展開期**、水木しげる記念館開館後の妖怪ブロンズ全国公募開始の2004（平成16）年から水木しげるロードの入込み客が年間147万8千人を超えた2007（平成19）年末までを **発展期**として期間を分けて、内容を分析する。

構想期 1988～1992

(昭和63年～平成4年)

1 大森洋子、西山徳明（1997）：「歴史的町並み地区における観光活動設計に関する研究」第32回日本都市計画学会都市計画論文集 pp277-282

1988（昭和63）年に境港市役所内に若手職員14名による「街づくりプロジェクト委員会」がつくられ、市民参加のもと「緑と文化のまちづくり」を策定し、1990（平成2）年には「緑と文化のまちづくりフォーラム」を開催した。地元出身の漫画家水木しげる氏をパネリストに招き、水木氏の作品を町に置いてはどうかの話が本人からでる。この発言が今日の水木しげるロードに至る発端ともいえる。この発言をきっかけにプロジェクト委員の一人が水木漫画の利用を思いつき「水木しげる漫画の妖怪ブロンズ像設置によるまちづくり」をプロジェクト委員会のアイデアとして境港市長に提案する。このアイデアを衰退している商店街の活性化につなげることができないかと自治省で新たに創設された「商店街等振興整備特別事業制度」を利用して商店街振興のための道路改修を検討する。しかし、地元商店街はもとより市役所内部でもこのアイデアには妖怪に対するイメージの悪さから反対するものが多かった。市の担当職員の根気強い熱心な説得によって松ヶ枝町南側の何人かが同意し、アイデアが実現することになった。水木しげる漫画の人気妖怪キャラクターの鬼太郎、目玉おやじ、ねずみ男等6体のブロンズ像が1992（平成4）年松ヶ枝町南側歩道に設置された。また、この同時期の1991（平成3）年3月には駅前大正町を含む14.7haで土地区画整理事業が決定公告され、JR境港駅及び港湾関連施設の統合整備による、駅前の道路・公園等の公共施設整備がこの年に始まる。

このような経緯から明らかなように、「空間設計」である公共整備型の土地区画整理事業はもとより、「商店街等振興整備特別事業制度」を利用した水木しげるロード整備事業は境港市を中心とした行政主導で始まった。また同時期の、1991（平成3）年8月に水木しげる氏の自伝「のんのんばあとオレ」がNHK

でTVドラマ化され5回にわたって全国放送され、翌1992（平成4）年8月にも「続のんのんばあとオレ」が同じく5回シリーズで放映されて、水木しげる氏のふるさと境港と妖怪の関係が知られるようになり、地元境港市が関与しないで「誘致設計」的に境港は全国に紹介PRされて事業推進が後押しされた。

初動期 1993～1997 (平成5年～平成9年)

地元住民の同意を取り付けた松ヶ枝町南側に妖怪ブロンズ像17体が追加され、1993（平成5）年7月に水木しげるロード200mに23体のブロンズ像が設置完了して、オープン式典・除幕式が行われた。水木しげる氏を招いての境港市主催の式典は「演出設計」として機能した。ところが、オープンの3日後に妖怪ブロンズ像が盗まれて、そのニュースが全国放送された。このニュースは経費をかけることなく「誘致設計」的PR効果が大で、他県からの見学客を呼び込んだ。また、JR境線を走る列車に漫画キャラクターの鬼太郎をペイントした鬼太郎列車をJRが1993（平成5）年9月に運行を開始させた。1994（平成6）年7月には境港市内の郵便局が妖怪漫画の消印サービスを始めるなど、郵便局やJR等公共的機関が「演出設計」となる水木しげる氏の妖怪漫画を利用したサービス業務を始めた。このような時期に境港市の水木しげるロード整備に対し1994（平成6）年9月鳥取県は景観大賞を授け、翌1995（平成7）年7月には同じく建設省は「手づくり郷土賞」を授けるなど、行政機関はお墨付きを与え、事業推進の後押しをした。

この年、境港市は市報「さかいみなと」12月号に市報別冊として妖怪ガイドブックを作成し市民配布した。これを観光客用に境港市観光協会は再編集して増刷し、100円で販売²

など博覧会の終了後に着手し、翌1998（平成10）年には6億6千万円で竣工される予定であったが、境港の基幹産業である水産業の不振等で境港市の財政状況も厳しく反対する議員もあって、1998（平成10）年1月に計画の一時中断を検討し、市長は同年3月議会で中断決定を説明した。

しかしながら、水木しげるロードの入り込み客は2000（平成12）年には61万人を超える状況になっていた。その2000（平成12）年水木しげるロード沿いの古い老舗の料亭を改装して水木しげる記念館にするアイデアがでる。境港市は2000（平成12）年10月に鳥取県西部大震災の被害もあった中、「水木しげる記念館」設置に反対する意見もあったが自治省の地域総合整備事業の助成期限（平成13年度末）に間に合うよう境港市では2001（平成13）年6月に補正予算を計上し、「水木しげる記念館」設置に着手することになり、総事業費4億8千万円の経費で建物を取得改修して、2002（平成15）年3月に観光活動の核となる施設は竣工した。

この時期はどのような活動をすべきか商店街の店主らが中心になって「水木しげるロード活性化計画」を作成し、民間企業、各団体は模索しながらも、それぞれ「演出設計」であるイベントの知恵を絞って積極的に実施し、行政機関も2002（平成14）年の鳥取県開催の国民文化祭をきっかけにそれらを取りまとめて支援をするようになる。また、懸案となっていた水木しげる記念館を自治省地域総合整備事業の助成期限ギリギリに申請着手して、既存施設の取得改修の手法で核となる「空間設計」を予定より安くしかも広い面積で実現させた。水木しげるロードの事業完成以降の目玉となる「空間設計」のハード事業は、この記念館の完成でもって終了する。

発展期 2004～2007

（平成16年～平成19年）

自治省の助成事業が終了し、また逼迫している境港市の財政状況ではこれ以上のブロンズ像の設置は望めないと、境港市観光協会、境港商店街連合会、水木しげるロード振興会、水木プロダクションで「妖怪ブロンズ像設置委員会」を立ち上げ、妖怪ブロンズ像のスポンサーを2004（平成16）年11月に全国公募し、86体になっていたブロンズ像を100体までに増やす計画をたてた。これは単なる「空間設計」の整備ではなく全国公募することと寄贈者名のプレートを取り付けることで「誘致設計」的な機能も果たし、1体100万円の負担であったがブロンズ像スポンサーは公募開始から2ヶ月も経たない内に目標を超える申し込みで期待以上の成果を上げ、2005（平成17）年4月には16体が完成して合計102体となった。6月には、合計102体になった妖怪ブロンズ像に加えて5枚の妖怪レリーフ、妖怪倉庫、水木しげる記念館内の妖怪などを紹介した「誘致設計」となる単行本「水木しげるロードの妖怪たち」を境港市観光協会が刊行した。この本は120体になるまで2回改訂され、後に実施される「境港妖怪検定」のテキストとなるが様々な取り組みとリンクした「誘致設計」の好事例といえよう。7月には11体のブロンズ像が増設され、再度水木しげる氏を招いて、妖怪ブロンズ像の入魂式を実施し、水木しげるロードを大行進した。また、2005（平成17）年8月には、水木ロードでもロケが行われた映画「妖怪大戦争」が全国で封切りされた。JRでは米子駅から境港駅までの16駅を「観光路線化」して駅も妖怪の愛称名、妖怪の装飾を付けて11月に完成させ、車両の妖怪デザインもリニューアルした。

2006（平成18）年1月には鳥根県隠岐青年会議所によって、境港から隠岐までのフェリー

りブームが去っている。

北栄町の「コナンの里づくり」の計画の中で、コナン通りを「名探偵コナン」に登場する「ベーカー街」をイメージしたレンガ基調の商店街、景観に形成することがあげられているがそのようなイメージは北栄町にはない。青山剛昌ふるさと館の利用促進案にしても、地域のイメージと乖離したアイデアでは、いくら「名探偵コナン」に人気があるといっても、中川氏の懸念どおりブームが来てもすぐ去るかも知れないし、ブームさえ来ないかもしれない。境港で水木氏の妖怪漫画の活用を考えた時、地域イメージとの関連性を重要視していたわけではなかったかも知れないが、水木氏の妖怪漫画を生み出す背景は彼の子供時代の境港であり、寂れた商店街にそのイメージがしっかりと残っていたことも功を奏したといえよう。北栄町の青山剛昌ふるさと館の活用方策では、今一度、地域イメージに相応しい「観光活動設計」のアイデアの検討と実行が望まれる。

3.3 水木しげるロード関連記事の新聞掲載

最近では「水木しげる関連」の新聞記事は毎日のように目にするが、水木しげるロードが着手されてから様々な活動のプロセスを経た結果である。そのプロセスの中で新聞記事に掲載される取り組みとして扱われたかどうか、その掲載件数を調べた。

「水木しげるロード」オープンの1992年から2007年12月まで約15年間の新聞記事を日経テレコン21の検索サイトより抽出して基礎データとし、「水木しげるロード」(完全一致)で検索された全国紙5紙(日本経済新聞、朝日

新聞、毎日新聞、読売新聞、産経新聞)の中から掲載数が一番多かった朝日新聞の記事を抽出し、年別、時期別に集計した。

構想期(1988~1992)には記事の掲載はなく、**初動期**(1993~1997)の1993年2月妖怪彫刻ロードが「水木しげるロード」と名付けられて整備される記事が最初で、水木しげるロードのオープン式典のお知らせ記事の他、オープン直後のブロンズ像盗難事件記事の掲載が4件あるが、1997年の博覧館期間中はほとんど関係記事の掲載はなく、最初の水木しげるロードオープン年の13件を含めても5年間にわずか23件で、それほど多く取り上げられていない。

模索展開期(1998~2003)になっても目に見える活動のなかった1998年2件、1999年3件、2000年5件と掲載件数は少なく、12月に「鬼太郎の塔」の民間設置の記事がある他は「水木しげるロードで第一声」「水木しげるロードの　さん」と固有名詞化した掲載である。しかし、2001年の妖怪霊在月制定に伴うイベントなどが紹介されて掲載記事が増える。郵便局名を水木ロード郵便局への変更記事、水木妖怪文化館(仮称)計画の予算記事、水木しげる記念館の開館など行政機関の記事、ニュースソースの主体が特定出来ない記事などが2001年21件、2002年13件、2003年19件と後半に増え、模索展開期は計63件の掲載があった。

発展期(2004~2007)は民間団体が連携して設置委員会等を組織して妖怪ブロンズ像、妖怪街灯スポンサーの全国公募の周知記事掲載の他、次々に民間団体が主催するイベント案内や定期的な観光情報の掲載、記者独自のコラム記事や水木しげるロード紹介記事が20

5 中川理(1996年)「偽装するニッポン」pp219-220 彰国社

6 「偽装するニッポン」の中では岩手県の吉里吉里王国、福島県のニコニコ共和国等のミニ独立国の例の他、鳥取県溝口町の鬼のまちづくりによる公衆トイレやミュージアムの例が紹介されている。

04年12件、2005年16件、2006年35件、2007年50件と増え、4年間で113件の掲載件数となっている。

以上の結果から新聞の掲載件数をみても初動期はあまり関心をもたれず、模索展開期の後期になって妖怪霊在月の様々なイベントで掲載数も増え、発展期に入り全国規模の妖怪そっくりコンテスト、妖怪川柳などの募集、結果発表などで新聞掲載件数も増加し、また水木しげるロードへの入り込み客数も増えている。全体的に新聞掲載件数が増加傾向の中で、特に妖怪霊在月のイベントが増加した2001（平成13）年、全国を対象にした妖怪そっくりコンテスト、妖怪川柳などを次々実施した2006（平成18）年、2007（平成19）年は応募の案内の他、コンテストの様子や結果発表の掲載など民間団体がニュースソースの記事が図5のとおり増えている。なお、これらの記事掲載によってコンテストの応募数が約3倍に増加するなどの効果をもたらした要因の一つと考えられる。

これらの水木しげる関連事業の展開プロセ

スを期間ごとにまとめた一覧は図6、図7のとおりである。

4. 妖怪ブロンズ像設置の変遷と「空間設計」

JR境港駅から東側に連なる大正町、松ヶ枝町、本町、銀座中町に至る道路に沿って商店街があるが、現在この沿線の歩道に妖怪ブロンズ像が120体設置されているのが水木しげるロードである。

この水木しげるロードにブロンズ像を設置する「商店街等振興整備特別事業」開始の1992（平成4）年時点では大正町の駅側は土地区画整理事業が始まったばかりであった。もともと大正町は駅と港湾運輸関連の業務用地が多く、新港建設に伴い整理統合された内港再整備の一環として土地区画整理事業は着手され、商店街等振興整備特別事業とは直接関係なく実施されていた。JR境港駅の移転のほか、JR構内上屋、運送会社の倉庫作業施設等の解体と新たな区画街路の整備に取り掛かり始めた時期で、商店街等振興整備特別事業

図5 水木ロード関連記事掲載件数と入込客数の推移（新聞掲載数は朝日新聞）

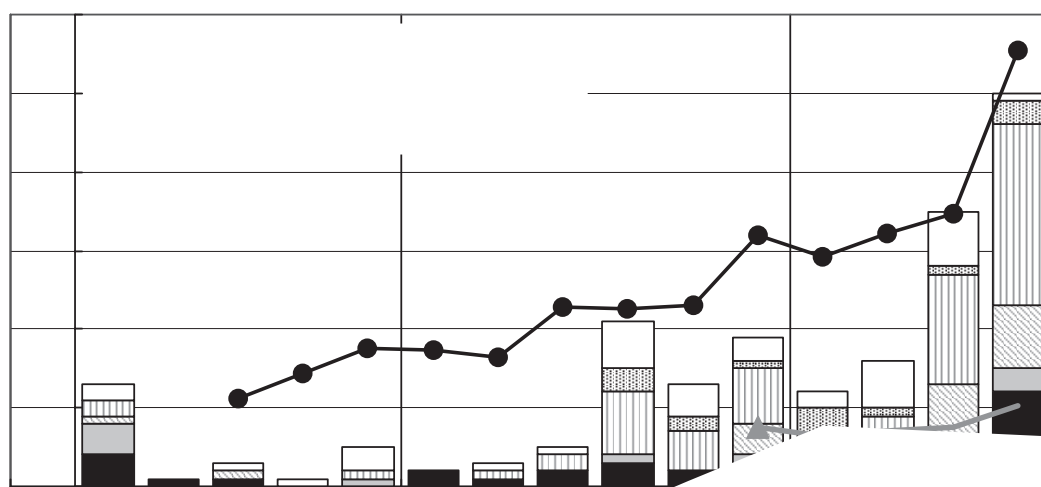


図8 水木しげるロード周辺地図 (2008)

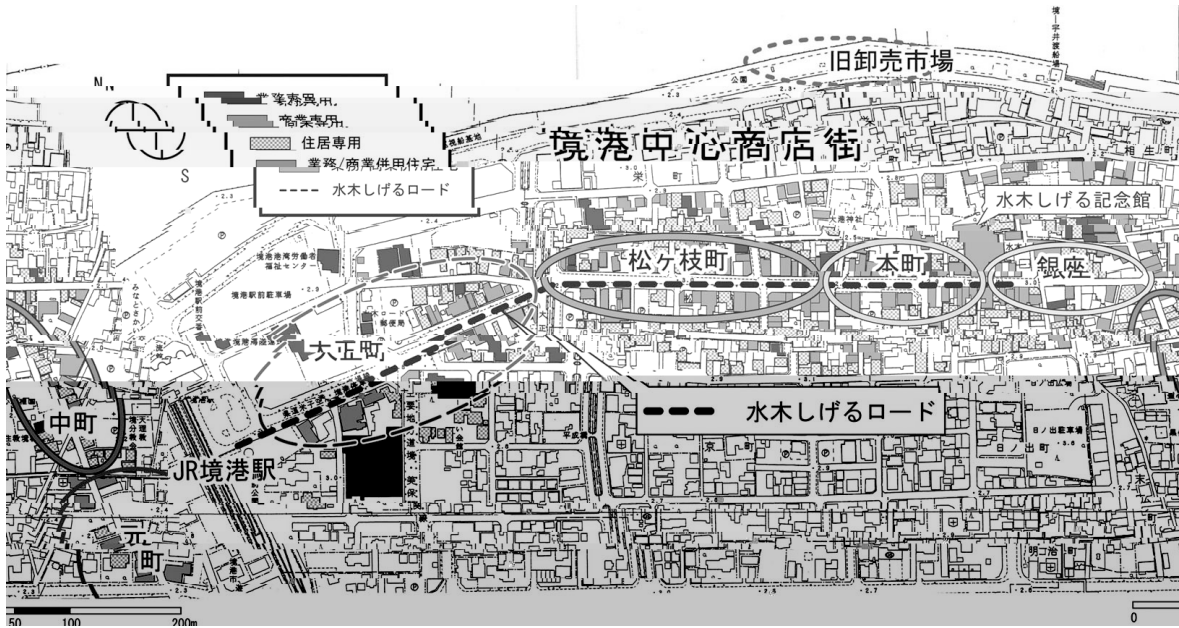
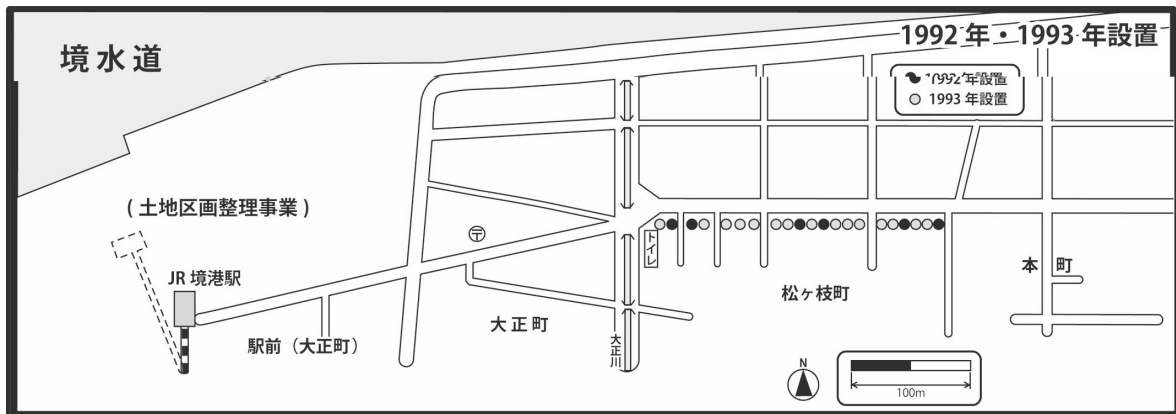


図9 妖怪ブロンズ像の設置位置 1



による妖怪ブロンズ像の工事がようやく始まった時期と重なっている。1992（平成4）年に6体の妖怪ブロンズ像が設置されたのは松ヶ枝町南側の最初に同意を得られた商店前の歩道である。1993（平成5）年に同じ松ヶ枝町南側に17体追加され約200mに23体となった。

（図9）

1994（平成6）年には図10のように松ヶ枝町の西側に続く大正町の橋部分を含む両側にブロンズ像が17体追加され約350mに40体となった。1994（平成6）年8月にJR境港駅の移転工事は着手し道路工事も併せて進み、

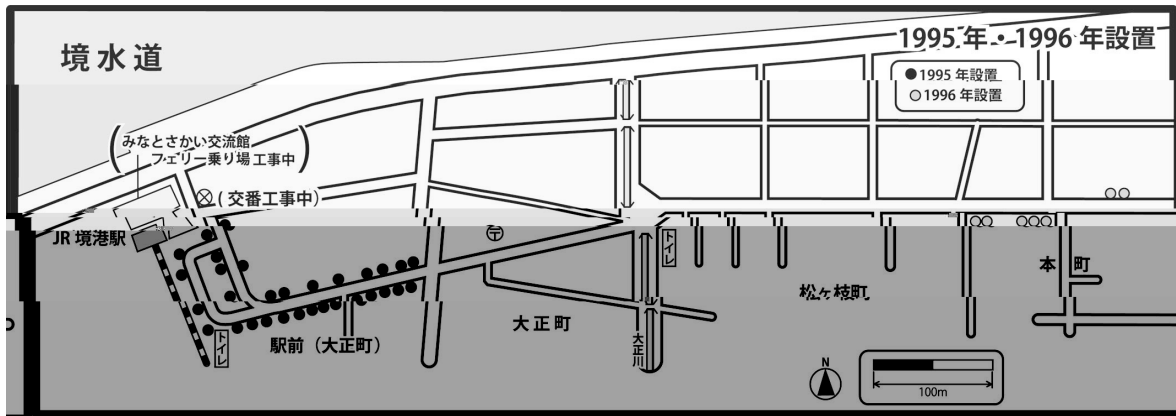
1995（平成7）年2月に境港駅はリニューアルオープンした。1994（平成6）年に鳥取県で建設計画をつくったフェリー乗り場も兼ねた「さかいみなと交流館」がJR境港駅に隣接した基本設計で1995（平成7）年7月にまとまった。

1995（平成7）年には境港駅周辺の土地区画整理事業区域は妖怪ブロンズ像設置を説得しなければならない関係者も少なく一気に1995年に31体を設置し、1996（平成8）年には本町に9体を設置して、8月自治省商店街等振興整備特別事業による水木しげるロード整

図10 妖怪ブロンズ像の設置位置2



図11 妖怪ブロンズ像の設置位置3



備は約800mに合計80体の妖怪ブロンズ像を設置して終了となった(図11)。

翌1997(平成9)年から1999(平成11)年までに新たな設置はなく、2000(平成12)年地元企業の寄贈による妖怪ブロンズ像の2体と郵便局のポストにブロンズ像をのせた妖怪ポストの3体が加わった。2001(平成13)年には追加がなく、水木しげる記念館の竣工に間に合うように2002(平成14)年に境港市が3体のブロンズ像を発注し、2003年(平成15)年3月に設置完了し、86体となった。

妖怪ブロンズ像設置は事業に最初に賛同した松ヶ枝町南側からスタートし、大正町に移り土地区画整理事業区域内の駅前大正町とつ

ながり、JR境港駅とフェリー乗り場と観光案内所が入っている「みなとさかい交流館」から約800m東側に出来た水木しげる記念館までの間に86体のブロンズ像が並ぶ細長い「空間設計」が出来上がった。しかし、まだ密度の薄い部分もあり、100体までブロンズ像を増やしたいとの地元関係者の思いから、これ以上は予算が厳しいという行政に頼らず、2004(平成16)年スポンサーを全国公募し、自らの会社、団体もスポンサーになって密度の薄い部分に設置し、境港商工会議所は水木しげる記念館前に水木氏のブロンズ像を最後の120体目として寄贈し、15年間のブロンズ像設置の事業は終了した。

図12 妖怪ブロンズ像の設置位置4

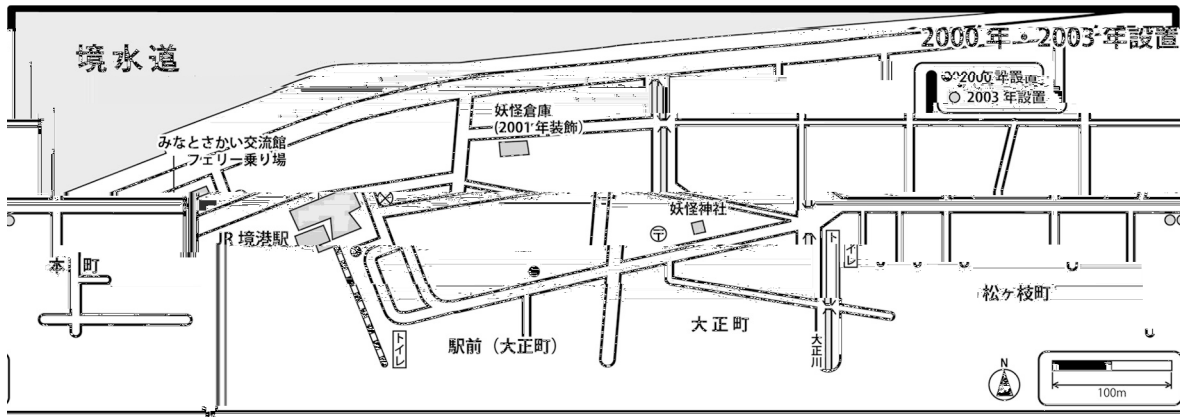


図13 妖怪ブロンズ像の設置位置5



図14 妖怪ブロンズ像の設置位置6



図15 水木しげるロード全体に並んだ妖怪ブロンズ像



5. まとめ

境港市の水木しげるロード周辺を観光活動設計という視点でプロセスをみると、まずJR境港駅を含む駅前周辺は土地区画整理事業を使ってその基盤となる整備が初動期に行われた。同時期に駅から東側に延びる商店街活性化のための道路改修として水木しげるロード整備が始められていたが、土地区画整理事業とリンクした公共事業としてすすめられたわけではなかった。妖怪ブロンズ像設置が全国ニュースとなってPRされる幸運もあって、集客効果が上がりブロンズ像設置が大正町に進展し、さらに駅前大正地区の妖怪ブロンズ像設置は水木しげるロード整備の商店街等振興整備特別事業と駅前の土地区画整備事業のタイミングが合って加速した。

財政的にいろいろと厳しい状況にあった境港市にとって国、県からの助成が受けられる事業でなければすすめられる状況ではなかった。「空間設計」の核となるフェリー乗り場を兼ねた「みなとさかい交流館」「水木しげる記念館」も公共事業の助成事業なくしては実現しなかったであろう。特に「水木しげる記念館」は境港市の財政状況から計画を一時中断し、自治省の地域総合整備事業の助成期限間際に古い料亭の取得改修の案が出て、ようやく実現した。計画どおりの場所では実現

しなかったが安くしかも広い場所で、水木しげるロードも若干延長される位置関係となり、逆に良い「空間設計」であったと云える。

水木しげるロードのブロンズ像設置も一度に整備するのではなく（一度に整備できる余裕もなかったこともあり）、徐々に整備を行い、1年ごとにブロンズ像が増えたこと、整備が終わった節目ごとにオープン式典を、水木氏を招いて実施したこと、様々なイベントを駅前広場や水木しげる記念館、妖怪神社で行うなど水木しげるロードと一体的に空間活用を行ったことで水木しげるロードへの集客効果があったと考えられる。

「空間設計」の出来上がりが終わりではなく、いかにその活用を図るか民間団体が中心になって知恵を絞り、「妖怪」や水木漫画の人気キャラクター「鬼太郎」等に託けたイベントを次々に実施してきたことも大きな成功要因である。映画会社、テレビ局も水木しげる氏の魅力と地元関係者の働きかけもあって、映画やテレビ番組の制作放映がなされ、その結果、「妖怪漫画家といえば水木しげる」であるが、「妖怪のまちといえば境港」を定着させて、「妖怪」がある意味で境港の地域ブランドとなっている。それを今後どう活かしていくのが継続発展させる鍵である。

様々な取り組みがタイミングよく機能して

観光入り込み客数を順調に増やし、水木しげるロードは商店街再活性化のモデルとして評価されるようになったが、必ずしも順風満帆であったわけではない。また、今後もこの好調さが保たれるという保証もない。ハードな整備事業が一段落した時期に、それらを今後どのように活かしていけば良いのか真剣に考え、知恵を絞り実践してきたように、この好調さをどう維持発展させるか、また真剣に考えなければならない時期に入っている。そのため、今一度、プロセスを振り返り、また地域で起こっている現象に刮目して問題点、課題を抽出することも必要である。

すでに、観光地して活性化した地域に起こりがちな事例がわずかであるが散見されるようになってきている。境港の地域の魅力は何なのか原点に戻り、観光地化していない昭和30年代の商店街が水木漫画にフィットしたことを思いおこし、どこの観光地でもありそうな地域のイメージに相応しくないフェイクな観光土産店をつくってはいけない。また、全国的に評価されるようになってくるとその功績を、自分のものにしようとする者も出てくる。個人力でここまでになったのではなく、それぞれ各個人の役割を超えた連携が力を倍増させて成果を上げてきたのだとの認識を持たねばならない。苦戦している時は一緒になって助け合いながら進むが好調になると功利を競ってものごとが上手く行かなくなるのは、まちづくりに限ったことではない。そのような者が出てくると上手く行っていた連携がくずれ、活性化が留まり、衰退が始まるようになる。まだ、そのような例は前面に出てないが、各団体に聞き取りを行っていく中で感じた。それが杞憂でなければ解決していかなければならない今後の課題である。

「空間設計」「演出設計」「誘致設計」の絶妙なタイミングと民間団体、公共的機関、行

政機関が信頼しあったバランスの良い連携が境港の活性化の成功要因である。妖怪、漫画を使ったまちづくりで先行して評価をあげた境港に参考となる同じモデルがないことも課題だが、成功要因となったバランスの良い連携を活かして、今後さらにオンリーワンのまちづくりモデルになるチャンスでもある。今後課題の地域の魅力に相応しい観光土産店をどう造っていくか、相応しくないものをどうやって相応しいものに修正し、魅力をつけていくか、今後、水木しげるロード周辺商店街全体に拡がりを持たせた検討が必要である。

謝辞

資料提供をいただきました境港市役所、聞き取りに応じていただきました境港市観光協会、水木しげるロード振興会の関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

【参考文献】

- 中川理．1996．『偽装するニッポン』彰国社．
- 大森洋子・西山徳明．1997．「歴史的町並み地区における観光活動設計に関する研究」『第32回日本都市計画学会都市計画論文集』：277-282．
- 境港市．2001．『境港市四十五周年史』境港市．
- 境港市観光協会．2005．『水木しげるロードの妖怪たち』境港市観光協会．
- 澤田廉路．2005a．「水木しげるロード整備等が及ぼす経済波及効果について」『TORCレポート』No.25：62-73．
- 2005b．「水木しげる関連事業と地域マネジメント」『TORCレポート』No.26：100-112．
- 2006．「青山剛昌ふるさと館開館に伴う地域活性化の展望と課題」『TORCレポート』No.28：112-124．
- 2007．「地域資源を活かした中心市街地商店街の活性化について」『TORCレポート』

No.29 : 71-84.

五十嵐佳子. 2006. 『こんなに楽しい！妖怪の町』
実業之日本社.

黒目友則. 2007. 『妖怪になりそこなった男水木
しげるロード物語』YMブックス.

境港市観光協会 : <http://www.sakaiminato.net/>(2008
年2月)

日経テレコン21 : [http://telecom21.nikkei.co.jp/
nt21/service/](http://telecom21.nikkei.co.jp/nt21/service/)(2008年2月 : 記事検索 / 新聞)